

# 2019アジア選手権報告書

参加団体名：NTT 東日本

氏名：林 靖晴 & 佐々野 大輝

種目：M8+

## ●1-1 結果

1位 ウズベキスタン 2位 日本 3位 インド 4位 韓国 5位 タイ

## ■1-2 レース展開

<Preliminary (10/23 11:14)>

各々陸上でのアップを済ませて、いざ水上へ。レーン決めのレースとはいえエイトでのレースもOX盾以来なので、どのレベルのパフォーマンスが出せるか、『全力』をキーワードにチャレンジ。気温約18℃水はかなり冷たい。水面のコンディションは風も穏やかで波も無く漕ぎやすいコンディション。水上でのアップも完了し発艇台へ。いよいよM8+のアジア選手権が始まる。アテンションゴー！

まず飛び出したのは練習の時からキレイの動きを見せていたインド。トップスピードだけならアジアNo.1と言わんばかりの高レートのスパートで他国との差をどんどん広げていく。1Qのトップはインドが獲り、日本、ウズベキスタンと続いたが2Qに入ったところで良いコンスタントを築いていた日本がインドを捕らえトップに、2Qが終わる頃にはウズベキスタンもインドを捕らえ2位に浮上、その勢いのまま日本に喰らい付いてくる！そして3Q終盤、ついに日本がウズベキスタンに刺されるが日本も喰らいつく。我慢比べのつばぜり合いだ。しかし日本は前半落ち着いて入った分余力があった。残り300m、ラストスパートのコールが入り日本が一気に加速。ウズベキスタンに3秒、インドに9秒の差を作り1位で初戦を終えた。特にコンスタントのスピードの向上が課題に残るレースになったので2日後のレースに向けてさらに調整する。

<Final(10/26 13:00)>

予選から2日間の調整を挿み予選の時よりも調子の良さが伝わってくるが、水面のコンディションは韓国に入ってから見たことがない強い逆風、良いとは言えないコンディション。そして気温も最低気温が3℃、日中の気温は15℃ないか、薄手のダウンが欲しい。それでもいつも通り陸上のアップを済ませ、自分たちの漕ぎを終始表現できれば勝てるという確かな自信を持ちいざ水上へ！いよいよアジア金メダルをかけたM8+の決勝が始まる。定刻通りのスタート！

まず飛び出したのはやはりインドだが、ウズベキスタンもスタートから飛ばしてきた。しかしインドには予選の時よりもリードはされていない。日本のスタートのクオリティも予選に比べて増していたのだ。コンスタントに切り替えるところではインド、ウズベキスタンにリードを許したものの艇差は十分に優勝射程圏内、良い位置につけたところでウズベキスタンはさらに日本との差を広げにきた！

500m通過時点で1位ウズベキスタン、2秒差でインド、日本が続く。日本は空回り気味のリズムではあるもののコンスタントで減速したインドを抜き去り、ウズベキスタンを捕らえにかかったがウズベキスタ

ンは完全に日本のアタックのタイミングより先手に仕掛けてきた。思うように縮まらない焦燥感と強風に煽られリズムは微妙にずれ始め修正しきれない。

そのまま終盤を迎えウズベキスタンに嫌なレース展開を強いられた日本は快心のラストスパートも不発。2位でフィニッシュした。艇上で立ち上がり歓喜に満ち溢れるウズベキスタンを横目にオアズマンとして素直に賞賛しなければならない残酷さも感じながら、お互い健闘を讃えレースは終了。銀メダルで幕を閉じた。

### ■1-3 反省点

今回の敗因を挙げるならばフィジカルは当然のことながら『メンタルの弱さ』だと感じた。相手のスタートからの飛び出しに焦り、思うような Rowing ができなかったところ。是が非でもスタートでトップを獲るといふ戦略もあったかもしれないが、今の自分たちが最も良いパフォーマンスを出せるレース展開で臨んだ結果、先行されていたとしても焦らず『一体感を作り出せるか』が今後の課題となった。個の強さや頑張りだけでは艇に与える影響が他の種目よりも小さいエイトにおいて、『一体感』の向上は戦略の引き出しを増やす他、足し算ではなく掛け算のスピードに昇華でき、エイトは爆発的なクルーの進化の可能性がある。また、『一体感』は単独クルーの強みの一つでもある。さらに醸成しエイトでのアジアリベンジと世界への挑戦を果たしたい。

### ●2.国際大会を経験して良かったこと、困ったこと、今後のボート人生にどのように影響するか。

中村団長が韓国語と文化に堪能であるおかげで、滞在中に困ることはなかった。レース日のシャトルバスの発車時間も、運営側と交渉のうえ変更していただいた。もしもケガや病気があった場合は、医療スタッフの充実が課題となったかもしれない。また、広報スタッフを充実させることで、日本ボートやスポーツ界全体を盛り上げることができるのではないかと。プロモーション次第では、寄付金の増大などにより更なる強化基盤の充実にもつなげられる可能性があるはずだ。

コースの環境については、忠州ボートコースは世界大会で使用されることもあり、世界大会並みの盛り上がりを見せ大会への力の入れようが伝わってきた。運営スタッフの熱心さやプロモーションの巧みさも目立った。コース自体は川幅も広く滞在した期間は基本的に穏やかなコンディションで漕ぎやすいコースという印象。ただし近くに軍の飛行場があり戦闘機の爆音で会話が遮られるシーンもあった。また、ボートコースにはおしゃれなカフェやキャンプ場、サイクリング施設など様々なスポットがあり、週末はボート選手よりも一般の方の利用が多いほどで付加価値の高さがうかがえた。もちろん大会のレベルによる差はあると思うが、日本とは違う空気、見知らぬ土地・食事、海外選手の身体の大きさ、応援の熱量など、実際に訪れて自分の目と体で体験しなければ知りえない価値の高い情報がある。(例えば、エルゴの漕姿や各種スコア。サウジアラビアの強化が著しいが、元イギリス代表・現サウジアラビアコーチからその模様を聞いた、など。)それらは競技力向上・普及活動の両方の側面において、非常に有益な経験・財産である。国際競争力を高めるうえでは必要不可欠のものであり、より多くの関係者の皆さんに体験してほしい。

最後になりますが、艇をコンテナに積むところから始まった今回の遠征、サポートにご尽力くださいました中村団長をはじめとする各団体のスタッフの皆さま、感謝を申し上げます。ありがとうございました。